

博士学位請求論文 審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号

氏 名 井出 新 君

論文題目 Localizing Christopher Marlowe A Study of His Life, Plays and Mythology

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授
同 文学研究科委員 原田 範行

副査 慶應義塾大学文学部教授
同 文学研究科委員 高橋 勇

副査 大阪大学大学院人文学研究科教授 山田 雄三

副査 オクスフォード大学ブレイズノーズ・コレッジ名誉フェロー
マーティン・イングラム (Martin Ingram)

学識確認 慶應義塾大学文学部教授
同 文学研究科委員 原田 範行

論文の概要

本学位請求論文は、16 世紀後半のイギリス・エリザベス朝にあつて傑出した劇作家でありながら、その作品分析においても伝記的事項に関しても、全容が未だ明らかになっていないクリストファー・マーロウについて、その行動の軌跡と作品世界の詳細を、従来の学説を検証しつつ、16 世紀後半のケンブリッジ、カンタベリー、そしてロンドンの社会的文脈の中に再定位し、マーロウ作品の再解釈の可能性および政治的、社会的、宗教的事情の具体的な諸相に関する新知見を示したものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

Introduction

Part I: Life

1. Reading the Social Space of Corpus Christi College

2. Nathaniel Woodes and the Corpus-Norwich Connection in the 1570s
3. Christopher Marlowe and the Community of Corpus Christi College

Part II: Plays

4. University Playwrights in the 1580s and *Dido, Queen of Carthage*
5. Chivalric Heroes, *Tamburlaine* and Militarizing London
6. Struggles for Survival: *The Jews of Malta* and the Diabolic Power of Theatrics

Part III: Myths

7. Robert Greene the Mythmaker
8. Localizing the Marlowe Myth

Conclusion

論文の要旨

クリストファー・マーロウ（1564–1593）は、16世紀後半のイギリス・エリザベス朝において、演劇的言語表現についても、また上演様式についても、ウィリアム・シェイクスピアに先駆けて近代演劇を確立した。その功績は、英文学史のみならず近現代演劇史においても傑出した存在と言えるが、残念ながらその生涯に関しては、主要作品の執筆時期さえも、今日に至る膨大な研究史の中にあっても、実はほとんど何も分かっていないという状況にある。マーロウに関する具体的で確実な資料として現存しているものは、教区記録簿の出生記録、彼がかかわった若干の裁判記録、彼の行動に関する枢密院からの指令書あるいは枢密院への報告書、彼が非業の死を遂げた際の検死官の報告書、そして彼の宗教的信条に関する伝聞記録のみである、と言ってよい。このようにきわめて限られた資料から劇作家マーロウの全体像を描くような評伝を立ち上げるのは甚だ困難ではあるが、しかしそれは決して、マーロウ研究において伝記記述の手法が有効なアプローチではないということを意味するわけではない。むしろ近年の評伝研究の役割は、文学研究のみならず、マイクロヒストリー、社会学、解釈人類学などが実証してきたように、個人が行為者として深くかかわった特定の社会的・文化的な場所（locality）と、そこに形成された複雑な世界観や価値観を再構成することで、その個人や関係者が産出するテキストの意味や性格を明らかにすることであり、この方法論はマーロウ研究にも応用することができる。本論文の基本的な立場もここにある。

したがって本論文では、残された資料に作品からの引用やさまざまな憶測を積み重ねて、推定上の全体像、すなわち「無神論者」で「転覆的」な劇作家という従来の定説をなぞるのではなく、マーロウの所属が明確に検証されている場所や社会集団の詳細に着目し、そこで形成されていた集合的経験や価値観を明らかにすることによって、マーロウの関心や経験を再構成するということが眼目となっている。その際、特に本論文が焦点を当てるのは、マ

ーロウが六年間を過ごし、枢密院との庇護関係を結んだことが判明しているケンブリッジ大学コーパス・クリスティ学寮における諸集団である。そうした諸集団の政治的・文化的な傾向や対抗関係は、従来必ずしも十分に分析されてきたとは言えず、それゆえ本論文は、主に第1部（Part I）において、同学寮や関係機関に保存されている諸種の古文書を綿密に調査してこれを再評価し、それをマーロウ研究の新資料として援用しつつ、ミクロなレベルに踏み込んでマーロウの交友関係を跡づけながら、当時の枢密院顧問官フランシス・ウォルシinghamによるマーロウへの庇護の力を査定している。そしてそれをもとに、主に本論文の第2部（Part II）および第3部（Part III）において、マーロウの諸作品ならびに彼と密接なかかわりを持つ当時の大学出身の文学者の作品、さらにはマーロウをめぐるさまざまなに流布した当時の言説群に再考を加えた。本論文は、すなわちこうした研究成果をまとめることで、これまでのマーロウに関する既成概念を解体し、いわば等身大のマーロウを描出して、斯界の今後の研究の礎石を提供しようとするものである。

本論文の各章の概要は次の通りである。“Life”と題した第1部では、先に述べた通り、マーロウが学んだコーパス・クリスティ学寮での諸集団の実態と相互関係が、従来必ずしも注目されてこなかった現存資料とともに明らかにされる。第1章「社会的な場としてのコーパス・クリスティ学寮再読（Reading the Social Space of Corpus Christi College）」および第2章「ナサニエル・ウッズと1570年代のコーパス・クリスティ学寮におけるノリッジ・コネクション（Nathaniel Woodes and the Corpus-Norwich Connection in the 1570s）」では、マーロウがコーパス・クリスティ学寮にやってくる三年ほど前の1577年に作成された学寮の部屋割表が詳細に検討される。学生たちは、学寮長によって割り当てられた部屋に居住し、また移動しながら、隣接する幾つかの部屋に同じ出身地同士の集団を築き、同じような属性や価値観を共有する者同士でつながる傾向を示していたこと、そしてその結束力が、奨学金や聖職禄、褒賞などによって宮廷や地方の有力者への帰属意識にも変貌していったこと、さらに他方では、政治的・宗教的スタンスの異なる他集団との対立関係を生む要因にもなっていたことが具体的に検証されている。第3章「クリストファー・マーロウとコーパス・クリスティ学寮の諸集団（Christopher Marlowe and the Community of Corpus Christi College）」では、ケンブリッジ大学古文書館に所蔵された副学長裁判所記録簿（大学関係者同士、あるいは市民との係争に関する裁判記録を収録したもの）を参照しつつ、マーロウとカンタベリー出身の学生たちが学寮生活での困窮を乗り越えるために密接な互惠関係を築いていたことを明らかにし、マーロウがカンタベリー人脈により、枢密院顧問官ウォルシinghamと知り合った経緯を検証している。他方、当時学寮内では、マーロウに関する「良からぬ噂」が広がっていたが、これが、学寮内で勃発していたウォルシinghamとカンタベリー大主教ジョン・ホイットギフトとの代理戦争であるとの見解を示し、反ウォルシingham派の教員や学生がマーロウに関する噂話を広めた可能性を指摘している。さらにケンブリッジ大学には、枢密院が大学当局に宛ててマーロウに関するこうした噂話の沈静化を求めた書簡が現存しているが、井出君はこれを精読し、それをもとに、マーロウと枢密院との密接な関係

を検証している。

“Plays”と題する第2部では、第1部での調査・考察の結果をもとに、マーロウの代表的作品群の再検討が試みられ、そうした作品群が、従来理解されてきた以上に当時の政治的・宗教的対立の文脈に置かれていたことを具体的に示している。第4章「1580年代における大学出の劇作家たちと『カルタゴの女王ダイドー』(University Playwrights in the 1580s and *Dido, Queen of Carthage*)」では、枢密院顧問官ウォルシンガムの庇護という事実を通じて、パトロネッジの力学からマーロウの作品群を読む必要があることを確認した上で、大学演劇が以前にもまして政治的・宗教的プロパガンダの様相を呈していたこと、そしてその中で、マーロウの『カルタゴの女王ダイドー』におけるエリザベス1世の表象が、女王の外交政策に対するウォルシンガムをはじめとするプロテスタント武闘派の不満を代弁する役割を担っていたことを論証している。続いて、マーロウの代表作と言ってよい『タンバレイン大王』を扱った第5章「騎士道的英雄たち、『タンバレイン大王』、武装化するロンドン(Chivalric Heroes, *Tamburlaine* and Militarizing London)」では、この作品を、ウォルシンガムが中心となっていたプロテスタント武闘派による反スペインおよび反ローマ教皇の聖戦プロパガンダの文脈で再検討する必要があると示されるとともに、この『タンバレイン大王』が、イングランド国教会だけでなくプロテスタント急進派にも大きな影響を与えていたことを検証しつつ、ケンブリッジ大学で神学を志していたマーロウの聖戦理論をも包摂して絶妙な政治的・宗教的スタンスを取るものであったことを明らかにしている。第6章「生き残りをかけて—『マルタ島のユダヤ人』と演劇的振る舞いの魔力(Struggles for Survival: *The Jews of Malta* and the Diabolic Power of Theatrics)」では、ヨーロッパ大陸で訓練されたイエズス会宣教師の潜伏活動、特にそうした渡英宣教師たちの演劇的振る舞い(theatrics)に対してこれを強く警戒していた1580年代後半のイングランド政府の動向に注目し、それが、演劇的振る舞いの力によって周囲の人々を騙し、マルタ島統治をもくろむ『マルタ島のユダヤ人』の悪党的登場人物バラバスに映じていること、そしてマーロウのこの演劇的振る舞いに対する姿勢が、経験知や実験・観察を重んじるカンタベリー出身の土木技術者たちの態度と通底するものであったことを論証している。そしてこうした政治的・宗教的動向が、その後1590年代に入って、イングランド国教会による異端狩りにマーロウ自身をも巻き込んでいく可能性があったことを示唆している。

第3部は“Myths”と題され、マーロウに関するさまざまな噂話が伝説化していく経緯が、言説流布の詳細を検証しつつ考察される。第7章「神話の作り手ロバート・グリーン(Robert Greene the Mythmaker)」では、マーロウのいわばライバルであった劇作家ロバート・グリーンが、故郷ノリッジで、コーパス・クリスティ学寮の反ウォルシンガム派の教員たちとグラマースクールの同窓生であったことを現存資料によって検証し、学寮時代のマーロウに関する歪められた情報を入手しやすい立場にいたことを明らかにする。その上で、グリーンが、1590年前後から読者や観客に回心を訴える作品群の執筆を通して自らを放蕩生活から立ち直った道徳的な劇作家として表象する一方、新進気鋭の劇作家マーロウ

を自分とは対照的な無神論的劇作家として攻撃対象にする必要が生じていたことを検証し、マーロウに関するいわば都市伝説は、ノリッジ出身の劇作家グリーンの自己成型的な回心プロジェクトに起因するものであったことを明らかにしている。さらに第 8 章「マーロウ神話誕生の場 (Localizing the Marlowe Myth)」では、マーロウを無神論者と名指ししたグリーンに続き、1593 年 3 月に騒擾罪で逮捕されたリチャード・チョムリーという人物が、取り調べの中で述べた、マーロウは「無神論の講義をローリー卿たちに行った」という証言を検証し、グリーンと言説の影響により、マーロウが「魔術師」であると考えられていた可能性を指摘する。そしてこの 1593 年の 5 月の殺傷事件によるマーロウの死によって、そうした一連の中傷的な噂話が「事実」として社会に認知され、「無神論者」への神の裁きの例証として流通することで、マーロウに関する都市伝説が完成したことを明らかにしている。

以上のような論述を通じて本論文は、マーロウの在籍したコーパス・クリスティ学寮における諸集団の交流や影響関係、あるいは対抗関係に関する綿密な調査を基礎として、彼の諸作品と彼にかかわる諸種の伝説の成立事情の重要な側面を明らかにし、文学史や演劇史、社会史などで従来定説とされてきたマーロウ像に大幅な修正を迫るものとなっている。

審査の要旨

本論文の受理決定以降、審査委員は意見交換を対面ならびに書面によっておこない、2024 年 10 月 31 日に公開審査会の形で最終審査および学識確認をおこなった。審査の要旨は次の通りである。

井出君が本論文の序論や文献書誌において示している通り、クリストファー・マーロウは、16 世紀後半のイギリス・エリザベス朝において、演劇的言語表現についても、また上演様式についても、ウィリアム・シェイクスピアに先駆けて近代演劇を確立した傑出した存在でありながら、しかもきわめて多くの研究成果がこのイギリス・エリザベス朝演劇について発表されているが、しかしその生涯に関しては、主要作品の執筆時期さえもほとんど分かっていないという状況にある。こうした現況はシェイクスピアについても同様であるが、マーロウの場合、ケンブリッジ大学に在籍し、また国内外においてイングランドの政治の枢要にあった枢密院に関わっていたことが明らかでありながら、その詳細がなおも不明であること、シェイクスピアに先駆けて近代演劇の様式を確立し、ブランクヴェースをはじめとする演劇的言語表現の展開にも大きな役割を果たしているものの、そうした功績のある作品群の成立事情やその周辺の社会的環境について、やはり詳細が分からないこと、そして、彼の人物像に関する流言がきわめて多いこと、などの点において、エリザベス朝の劇作家の中でも特異な研究状況に置かれていると言ってよい。おそらく現状のままでは、マーロウの作品群が成立した事情を示す痕跡がさらに少なくなり、極端に言えば、作品成立の文脈を廃した皮相な作品解釈のみが優勢になる恐れさえもあって、それは、マーロウの諸作品が生み出された豊かなダイナミズムそのものをエリザベス朝研究が今後見失いかねないという危険性をはらんでいる。こうした状況を踏まえて井出君は、文学研究のみならず、マイクロヒスト

リー、社会学、解釈人類学などによっても実証されてきた、いわば新たな伝記研究、すなわち、当該の個人が行為者として深くかかわった特定の社会的・文化的な場所 (locality) と、そこに形成された複雑な世界観や価値観を再構成することで、その個人や関係者が産出するテキストの意味や性格を明らかにする、という方法論を基軸に、本論文に研究成果をまとめている。具体的には、本論文第 1 部において詳細に論じられているように、マーロウが青年時代の六年間を過ごし、枢密院との庇護関係を結んだことが判明している、しかも従来の研究では必ずしも十分な注意が払われてこなかったケンブリッジ大学コーパス・クリスティ学寮における教員・学生の諸集団の政治的・文化的な傾向や対抗関係を現存資料から綿密に解き明かすという内容である。学寮の部屋割表からうかがえる同学寮の学生たちの動き、出身地やさまざまな属性で結びつく様子、さらにはそれが、奨学金や聖職禄、褒賞などを通じて当時の宮廷や地方の有力者たちとの密接な関係につながってくる状況を井出君は克明に論述し、その中で、マーロウがかかわることになった枢密院からの庇護、あるいはイングランド東部ノリッジや南東部カンタベリーにかかわる学寮の人脈の意義を明らかにした。井出君のマーロウ研究におけるこうした方法論の適切性と、古文書に基づいた詳細な実証的検証の成果について、審査委員はまずこれらを高く評価した。

井出君の本論文における研究成果は、この第 1 部を基盤としながらも、それを、第 2 部においてマーロウの主要作品の分析に関する鍵として援用し、また第 3 部において、マーロウをめぐる伝説誕生の原因として、改めてその重要性を説得的に論述することに成功している点にある。『カルタゴの女王ダイドー』（執筆は 1587 年から 93 年にかけてのある時期とされ、戯曲が出版されたのは 1594 年）が、枢密院顧問官ウォルシンガムの庇護というパトロネッジの力学に影響され、政治的・宗教的プロパガンダの様相を呈していたこと、そしてその中で、エリザベス 1 世の表象が、女王の外交政策に対するウォルシンガムをはじめとするプロテスタント武闘派の不满を代弁する役割を担っていたということ、1587 年もしくは 88 年に執筆したとされる代表作『タンバレイン大王』（戯曲出版は 1590 年）には、そのウォルシンガムが中心となっていたプロテスタント武闘派による反スペインおよび反ローマ教皇の聖戦プロパガンダの文脈が確実に読み取れるということ、また、『マルタ島のユダヤ人』（1589 年から 90 年にかけて執筆したとされ、戯曲出版は 1592 年）では、ヨーロッパ大陸で訓練されたイエズス会宣教師の潜伏活動、特にそうした渡英宣教師たちの演劇的振る舞い (theatrics) に対してこれを強く警戒していた 1580 年代後半のイングランド政府の動向が、そうした演劇的振る舞いの力によって周囲の人々を騙し、マルタ島統治をもくろむ悪党的登場人物バラバスに、そしてまた実は、経験知や実験・観察を重んじるカンタベリー出身の土木技術者たちに対するマーロウの態度にあらわれていることなど、各作品に対する井出君の論述は説得力に富み、その指摘はいずれも適切で、マーロウの主要作品の分析・解釈に新たな知見を加えるものとなっている。この点でも、審査委員はいずれも井出君の論証を高く評価した。

本論文の第 3 部は、マーロウに関するさまざまな噂話が伝説化していく経緯を、言説流

布の詳細を検証しつつ考察したものである。井出君は、マーロウの今日至るまでの諸伝説流布の最も重要な原因となったのが、彼のいわばライバルであった劇作家ロバート・グリーンであるとし、このグリーンが、ケンブリッジ大学の記録ではセント・ジョーンズ学寮在籍となっているものの、故郷ノリッジで、コーパス・クリスティ学寮の反ウォルシingham派の教員たちとグラマースクールの同窓生であったことから、コーパス・クリスティ学寮時代のマーロウに関する歪められた情報を入手しやすい立場にいたことを明らかにし、その上で、グリーンが、1590 年前後から読者や観客に回心を訴える作品群の執筆を通して自らを放蕩生活から立ち直った道徳的な劇作家として表象する一方、新進気鋭の劇作家マーロウを自分とは対照的な無神論的劇作家として攻撃対象にする必要が生じていたことを明らかにした。マーロウに関するいわば都市伝説は、ノリッジ出身の劇作家グリーンが、この自己成型的な回心プロジェクトに起因するものであったということになる。マーロウを無神論者と名指ししたこのグリーンに続き、井出君は、1593 年 3 月に騒擾罪で逮捕されたリチャード・チョムリーという人物が、取り調べの中で述べた、マーロウは「無神論の講義をローリー卿たちに行った」という証言を検証し、グリーンと言説の影響によってマーロウが「魔術師」であると広く考えられていたことを明らかにしつつ、このような状況下で起きた 1593 年 5 月の殺傷事件によるマーロウの死は、そうした一連の中傷的な噂話が「事実」として社会に認知され、「無神論者」への神の裁きの例証として流通し、かくしてマーロウに関する都市伝説が完成したと論じている。噂話が事実と認知されるという現象は古今東西広く見られるものであり、その具体的な経緯が不明なまま、噂話だけが流通してしまうことが少なくないが、井出君はさまざまな状況証拠を積み重ねて、マーロウが深くかかわった特定の社会的・文化的な場所と、そこに形成された複雑な世界観や価値観を再構成し、そうすることでマーロウの関係者が生み出したこのような噂話というテキストの性格を明らかにすることに成功している。この点でも、井出君の論証の適切さを審査委員はいずれも高く評価した。

このように本論文は、マーロウの在籍したコーパス・クリスティ学寮における諸集団の交流や影響関係、あるいは対抗関係に関する綿密な調査を基礎として、マーロウの諸作品と彼にかかわる諸種の伝説の成立事情の一端を明らかにし、文学史や演劇史、社会史などで従来定説とされてきたマーロウ像に大幅な修正を迫るものであると言える。本論文の末尾には、コーパス・クリスティ学寮における部屋割表をはじめ、多くの現存資料の写真が掲出されているが、井出君のマーロウ研究において脚光を浴びることになったこれらの資料はまた、イギリス・エリザベス朝における大学史や大学をめぐる社会史、制度史などの分野においても貴重な情報となるであろう。それらが、近代演劇の確立に大きな功績を残した劇作家の作品成立に重要な痕跡を残しているということは、マーロウをはじめとする近代演劇の劇作家たちがその作品創造において本来有していたダイナミズムを明確に示すものと考えられる。オクスフォード大学ブレイズノーズ学寮のフェローを長らく勤め、同大学でイギリス・ルネサンス史を講じ、今回の論文審査にもかかわったマーティン・イングラム氏も、歴史研究者としての観点から、そして自らもいわゆるオクスブリッジの学寮に長く在籍した経験から、

井出君の調査・研究手法の適切性と実証性をたたえ、オクスブリッジにおける学生、教員、卒業生の人脈研究が斬新な文学研究へと展開していくその研究成果に賛辞を惜しまない。

もっとも、こうした本論文においても、課題は残されている。第一に、マーロウの人脈と作品解釈にあたって、同性愛的要素に関する調査・研究が必ずしも十分ではないことである。特に、本論文が提出されて以降、例えば、オクスフォード大学オール・ソールズ学寮の上級フェローで英国学士院会員の Noel Malcolm による *Forbidden Desire in Early Modern Europe: Male-Male Sexual Relations, 1400-1750* (2024) などの研究成果が刊行されていることを考えれば、井出君はこの問題に対する自身の見解を明らかにすることが必要になるだろう。またこの第一の課題に関連して、井出君が、作品分析の主たる対象を先に挙げた三作品に絞っていることも、審査委員から課題として指摘された。言うまでもなくマーロウには、この三作品に加えて、『エドワード二世』、『フォースタス博士の悲劇』といった劇作品があり、また彼は『ヒーローとリアンダー』という叙事詩と抒情詩の中間的形態の詩作品も残している。マーロウにおける同性愛的要素を検討する場合、こうした作品群に関する考察がやはり不可欠となるであろう。第三に、本論文におけるコーパス・クリスティ学寮をめぐる調査・研究は詳細をきわめていて、そのこと自体は高く評価されるものの、それらが、同時代のケンブリッジ大学やオクスフォード大学の他の学寮と比較されることも、コーパス・クリスティ学寮のローカリティの特質を考える上でやはり重要であろう。第四に、本論文はマーロウと枢密院顧問官ウォルシinghamの関係性を軸とした政治的・宗教的動向に焦点を絞って論述されており、このこともまた方法論として適切ではあるものの、他方、マーロウの神話化を考える上では、1580年代から90年代にかけての不穏で多様な社会的情勢が、必ずしも井出君の議論に収斂するものとは限らず、例えば、頻発していた疫病にかかわる言説などとも密接に関係していたことなどへの考慮も必要になるのではないか、という指摘もなされた。そして第五に、井出君には、こうした諸点を勘案した上で、本論文のエッセンスをより簡潔にまとめた著作を公刊しつつ、それとともに以上のような課題を包摂したさらなる研究成果の発信が求められる、ということも審査の過程で指摘された。もちろん井出君は、本論文提出と前後して、イギリスのブルーア社から本論文のエッセンスをまとめた単著を刊行しており、そうした井出君の学問的営みには深く敬意を表するものの、本論文では論じ切れなかった部分への新たな研究が望まれるということも確かである。

このような審査を経て、審査委員一同は、井出君による本論文が、今述べたような今後の課題を有しつつも、マーロウおよびイギリス・エリザベス朝演劇に関するきわめて重要な貢献を国内外において果たすものであるとの判断で一致した。あわせて行われた学識確認においても、井出君は、その知見が十分であることが認められた。

以上により、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分ふさわしいものであると判断する。